

『西鶴諸国はなし』諸本調査報告

— 先後と版行状況 —

宮澤 照 恵

一 本稿は、『西鶴諸国はなし』諸本の書誌調査をもとに、欠損状況や異同箇所に関するデータの報告および数量的処理を通して先後を推定し、さらには版行状況に及ぼうとするものである。諸本の先後については、前稿『西鶴諸国はなし』成立試論―書誌形態を通して―⁽¹⁾において論証の続き上結論のみを示しておいたが、本稿はその補遺の意味合いを担うことを予めお断りしておきたい。

二

諸本の書誌解題については既に報告もあり前稿(注1論文)⁽²⁾でも一部触れたので、ここでは諸本の概略のみを示しておく。調査した版本は、東洋大学図書館蔵本(吉田氏旧蔵本)、天理図書館蔵甲乙二本、京都大学附属図書館蔵本、東京大学総合図書館蔵慶亨文庫本、東洋文庫岩崎文庫本の計六本で、他にマイクロフィルムによる調査であるが真山青果著作権委員会蔵本を加える。何れも同一版木に拠ったものであり刊記も共通している。

東洋大学図書館蔵本(吉田幸一氏旧蔵本)

五卷五冊。五冊ともに、原表紙雲形模様巻龍紋朽葉色地(紋は左右上下の四箇所)、原題簽中央双辺。卷三12丁ウ9に本文に続けて「助かりける」と書き入れがある。保存状態良。

真山青果著作権委員会蔵本(国文学研究資料館マイクロフィルム五九一四二による)。

四卷四冊(巻一欠本)。四冊ともに、原表紙毘沙門格子巻龍紋(紋は左上と右中央の三箇所。地色不明)、原題簽中央双辺(巻一の分下方欠損)。卷二21丁オ左下一部欠損。「東京 三越 真山様 4・1」の付札あり。

天理図書館蔵乙本(図書番号 913162-1イ49)

五卷二冊(巻一・二、巻三・四・五がそれぞれ合冊)。替表紙紺色無地、題簽なし。「昭和二十四年三月十六日(巳)寄贈」(単郭墨方印、数字は墨書)の印記。巻一1・2丁及び巻五16・17丁欠、巻一13丁欠損。保存状態不良。

京都大学附属図書館蔵本

五卷五冊。巻五は写本。巻一―四共に原表紙毘沙門格子巻龍紋朽葉色地(紋は巻一―三は左上と右中央、巻四は左中央と右

上下の三箇所) 一部欠損、五巻共に同一の模刻題簽 中央双辺
書名のみで巻の数を示さず、天理図書館甲本と同じ書体。巻一
に「長しまち主」「此本何方へ参候共早々御帰し可被成候」
の書き入れ。巻一〜四は明治三二年購求(大惣本)、巻五は大
正七年登記(印記による)。

天理図書館蔵甲本(図書番号 913-62-1101)

五巻五冊。巻二のみ後刷の取り合わせ本、巻一表表紙のみ、原
表紙毘沙門格子巻龍紋薄鶯色地(紋は左上下と右中央の三箇所)、
原題簽中央双辺、書体は東洋大本・真山本とは僅かに異なり、
後刷りと見られる(参考図版参照)。巻一〜五は模刻題簽。巻
二は天地切断の後他と同寸に補修が施されており、匡郭寸法も
若干小さい。「兎角庵」(果園文庫、各巻共通)・「能州/木下与
次兵衛/輪島」(巻二を除く各巻)の印記、及び巻一表紙右肩
の「四冊の内/木下氏」の書き入れがあり、補配の時期を推定
する手掛かりとなる。

東京大学総合図書館蔵霞亭文庫本

五巻五冊。原表紙茶色無地、原題簽左肩双辺(一部欠損)。巻
一 21丁ウ、巻五 8丁が一部欠損。紙質はやや劣る。

東洋文庫岩崎文庫本

五巻五冊。巻五は写本(前半は影写、後半は臨写か)書題簽。
巻一〜四共に原表紙肌色無地、原題簽左肩双辺。保存状態不良。
(参考)平井隆太郎氏蔵本(未見。江本氏解題(注2)による)。

五巻五冊。原表紙毘沙門格子巻龍紋朽葉色地(紋は左上下と右
中央の三箇所)、題簽なし。

以上の諸本は、表紙の形態から

- A 雲形模様巻龍紋朽葉色地(紋は四箇)、題簽中央
- B 毘沙門格子巻龍紋朽葉色系地(紋は三箇)、題簽中央
- C 茶系色無地、題簽左肩

の三種に分類され、版行が少なくとも三回に亙ると考えられる。ま
た諸本の細部には、これまでに報告されていない若干の補刻異同が
認められる。但し同じ刊記であることを始め字形や匡郭欠損部分に
至るまで共通性が見られ、同版本であることは疑いない。版木欠損
の報告・検討に入る前に、次頁に必要な範囲で七本の異同対照表を
まとめておく。なお、以下の※を付した部分については、末尾の参
考図版を参照されたい。

三

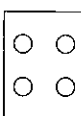
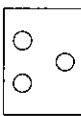
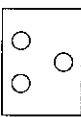
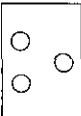
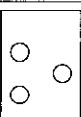
ここでは、諸本の匡郭・文字・挿絵等の欠損状況を項目別に報告
する。

① 匡郭

匡郭の欠損状況を表示する。但し「切れ」と「かすれ」の判別が
できないもの、及び版心と横匡郭との接点の切れは特に記さない。
欠損の所在箇所は、次の略号と端からの距離(cm)によって示す。

天	横匡郭上
地	横匡郭下

丁の表は右端からの、裏は左端からの距離
を示す。但し左右端および匡郭付近は距離
によらず、左・右で示す。

その他	句点異同	版心異同	卷一 上部 1オ	天地 卷一 匡郭 1オ	題簽	大き さ	(紋の 位置)	表紙	
丁の表喉下方 かすれ多い			5.7	19.3 × 14.5	16.1 × 4.5 中央	26.6 × 17.2		朽葉色 雲形模様 卷竜紋	東洋大本
			4.7	(卷一 1オ) 19.3 × 14.5	16.1 × 4.4 中央	25.5 × 17.7		昆沙門格子 卷竜紋	真山本
合冊三冊			(卷一 3オ) 5.2	(卷一 3オ) 19.1 × 14.4	ナシ	25.4 × 17.2		(紺色無地) (替表紙)	天理乙本
卷五は写本		卷四14丁「大」	4.6	19.0 × 14.3	(複製貼付) 16.1 × 4.3 中央	25.5 × 17.3		朽葉色 昆沙門格子 卷竜紋	京大本
卷二が後刷の取り合 わせ 卷一のみ原表紙、題 簽の書体が異なる※	黒丸点が2ヶ所余分 にある(卷一4オ)	卷四14丁「大」	4.4	19.2 × 14.5	16.1 × 4.5 中央 (卷一)	25.2 × 17.0		薄鶯色 昆沙門格子 卷竜紋(卷一)	天理甲本
かすれ、ベタ つき多い 紙質粗い	黒丸点が3ヶ 所余分にある (卷一18ウ4 行目・9行目 卷三19オ)		4.6	19.1 × 14.4	15.9 × 4.5 左肩	25.3 × 17.8		茶色無地	霞亭本
		卷一17丁上広 がり。「大」の 字体が異なる	4.6	19.2 × 14.7	16.1 × 4.5 左肩	25.3 × 17.8		肌色無地	岩崎本
					ナシ	25.6 × 16.7		朽葉色 昆沙門格子 卷竜紋	(参考) 平井本

諸本対照表

巻丁行	該当箇所	東洋大本	真山本	天理乙本	京大本	天理甲本	霞亭本	岩崎本
11ウ3	振孝の	△		?	▲	△	▲	▲
10オ7	者別そ	△ ₁		?	△ ₂	△ ₂	△ ₂	△ ₂
10オ6	かへりぬ	◎		◎	△	△	△	◎
9ウ4	なげ車	△		△	△	△	△	○
9オ10	まのうを	△		◎	△	△	◎	△
8ウ7	そふ	▲		▲	▲	▲	▲	▲
8ウ3	なをり	△		△	△	△	△	△
8ウ1	長痛	△		△	△	△	△	△
8オ9	小規	▲		▲	▲	▲	▲	▲
5ウ8	折あ	▲ ₁		▲ ₂	▲ ₃	▲ ₂	▲ ₃	▲ ₄
4オ4	親重	◎		◎	◎	◎	△	△
3オ9	名簡也	◎		◎	◎	◎	◎	△
1ウ7	をけもの	○			◎	◎	○	△
1ウ1	松義	△			△	△	△	△
一オ3	柳	△ ₁			△ ₂	△ ₂	△ ₃	?

巻丁行	該当箇所	東洋大本	真山本	天理乙本	京大本	天理甲本	霞亭本	岩崎本
4ウ4	船と	△ ₁		△ ₁	△ ₂	△ ₂	△ ₂	?
3ウ5	あひあゆ	◎		◎	△	△	△	?
二オ9	あひあゆ	◎	▲	▲	▲	▲	▲	▲
21オ5-7	ありあゆ	▲		▲	▲	▲	▲	▲
21オ4	けり	◎ _ト		◎ _ト	◎ _ト	◎ _ト	◎ _ト	◎ _ト
21オ右西郷1	厚ぬ	▲		▲	▲	▲	▲	▲
20ウ10	いん	◎		◎	△	△	△	?
20ウ左西郷10	そふ	▲		▲	▲	▲	▲	▲
※16ウ2-3	折あ	▲ ₁		▲ ₂	▲ ₂	▲ ₂	▲ ₁	▲ ₃
15オ10	折と	▲		▲	▲	▲	▲	▲
14ウ8	と	◎		◎	◎	◎	△	△
14ウ1	あひあゆ	△		△	△	△	△	△
13ウ6	と	△		◎	△	△	△	△
12ウ右西郷10	捨け	△		△	△	△	△	△

(七)

『西鶴諸国はなし』諸本調査報告

巻丁行	該当箇所	東洋大本	真山本	天理乙本	京大本	天理甲本	霞亭本	岩崎本
17オ8	おまじり	◎	△	△	◎	△	△	?
14オ9	おまじり	○	○	○	◎	○	○	▲
14オ8	おまじり おまじり	×1 ◎	×2 ◎	×2 ▲	×1 △	×2 ◎	×2 ◎	×2 ▲
9オ4	おまじり	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
三3ウ6	おまじり	◎	◎	◎	◎	◎	◎	△
19ウ9	おまじり	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
17ウ6 8	おまじり 下から七、八字目 續に續けて文	△1	△2	△2	△2	△3	△2	△2
17オ9	おまじり	△1	△1	△2	△1	△2	△2	△2
16ウ4 10	おまじり 下から九、十、十一字目 續に續けて文	▲1	▲2	▲3	▲2	▲3	▲2	▲2
※14ウ5 10	おまじり 上から五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百	△2	△1	▲3	▲3	▲3	△2	▲3
14オ7	おまじり	▲	▲	▲	▲	▲	▲	?
8オ8	おまじり	◎	△	▲	×	×	○	?
5オ5	おまじり	◎	◎	◎	◎	◎	◎	?
4ウ9	おまじり	◎	◎	◎	◎	△	△	?
4ウ5	おまじり	△	△	?	△	△	△	△

巻丁行	該当箇所	東洋大本	真山本	天理乙本	京大本	天理甲本	霞亭本	岩崎本
7オ1	おまじり	◎	◎	◎	◎	◎	◎	△
五3オ1	おまじり	◎	◎	◎	◎	◎	◎	▲
15ウ2	おまじり	△	▲	?	△	△	△	△
14ウ2	おまじり	▲	▲	?	▲	▲	▲	◎
14オ3	おまじり	◎	◎	◎	◎	◎	◎	△
10オ1	おまじり	◎	◎	△	◎	◎	△	△
8オ2	おまじり	◎	◎	△	◎	◎	△	△
7ウ10	おまじり	△	(かすむ)	(かすむ)	(かすむ)	◎	△	△
7ウ7	おまじり	◎	◎	◎	◎	◎	△	◎
7ウ6	おまじり	◎	◎	◎	◎	◎	△	△
6ウ10	おまじり	◎	△	△	△	△	△	△
4ウ9	おまじり	◎	◎	?	◎	◎	△	△
4ウ8	おまじり	△	△	△	△	△	▲	▲
※2ウ2	おまじり	△2	△1	△4	△3	△3	▲5	△1
四1ウ6	おまじり	△	△	?	△	△	△	?

(八)

巻丁行	該当箇所	東洋大本	真山本	天理乙本	京大本	天理甲本	霞亨本	岩崎本
16ウ4	拘 <small>く</small>	○	◎	◎		◎	△	
14ウ8	な <small>な</small> ー <small>な</small> ー <small>な</small>	◎	◎	◎		◎	▲	
13ウ4	おと <small>おと</small>	▲1	▲1	▲1		▲1	▲2	

③ 濁点

次に濁点の欠損状況を表示する。印刷時の諸条件の影響を受けやすい要素であるから、ここでは差異の明瞭なもの例示に止める。各本の欠損状況は次の記号及び括弧内の表示によって示す。

○ 欠損が無く完全

△ 欠損は無いが全体に非常に薄い(薄い)、一方の点が薄いか非常に短い(▽)、二線が繋がって一本になっている(∨)

▲ 一方の点のみ

× 点が無い

? 不明

巻丁行	該当箇所	東洋大本	真山本	天理乙本	京大本	天理甲本	霞亨本	岩崎本
15オ1	と <small>と</small> ー <small>と</small> ー <small>と</small> 火 <small>火</small>	▲		?	△ ▽	?	○	▲
12オ9	お <small>お</small> ー <small>お</small> ー <small>お</small>	○		▲	△ ▽	○	▲	▲

巻丁行	該当箇所	東洋大本	真山本	天理乙本	京大本	天理甲本	霞亨本	岩崎本
17ウ5	源 <small>源</small> ハ <small>ハ</small> 三 <small>三</small> 根 <small>根</small>	○		△ ▽	○	○	△(薄)	▲
18オ7	海 <small>海</small> 志 <small>志</small>	○		○	○	○	▲	▲
15オ3	佛 <small>佛</small> 師 <small>師</small>	△(薄)		○	○	○	×ナシ	○
5オ4	何 <small>何</small> か	△ ▽	△ ▽	○	○	○	○	○
5オ5	言 <small>言</small> 葉 <small>葉</small> 系 <small>系</small>	○	△ ▽	○	○	▲	▲	△ ▽
7ウ4	檀 <small>檀</small> 母 <small>母</small>	○	△ ▽	△ ▽	○	△ ▽	▲	?
9オ6	あ <small>あ</small> ま <small>ま</small> ん <small>ん</small> く <small>く</small> 後 <small>後</small>	○	▲	▲	○	△ ▽	○	○
14ウ7	刀 <small>刀</small> を <small>を</small> ば	○	○	○	▲	△ ▽	○	○
19オ1	と <small>と</small> ろ <small>ろ</small> ね <small>ね</small> ば	○	○	○	△ ▽	▲	○	○
19オ4	惜 <small>惜</small> し <small>し</small> み <small>み</small> か	▲	▲	▲	▲	△ ▽	×	○
3ウ3	お <small>お</small> の <small>の</small> ふ <small>ふ</small> し <small>し</small>	△ ▽	▲	▲	▲	△ ▽	▲	▲
9ウ5	唯 <small>唯</small> へ <small>へ</small> ど <small>ど</small>	▲	▲	▲	▲	○	▲	▲
11オ5	内 <small>内</small> 衣 <small>衣</small>	○	△ ▽	▲	○	○	△(薄)	△(薄)
4ウ3	拘 <small>拘</small> で <small>で</small> か	○	▲	?	▲	△ ▽	▲	▲

巻丁行	該当箇所	東洋大本	真山本	天理乙本	京大本	天理甲本	覆写本	岩崎本
8才4	柳どろろき	○	○	?	○	△▽	▲	○
5才8	湖よ	△▽	△▽	○	○	○	△い	
12才2	左まへを	○	○	○	○	△(字)▽ い	▲	

④ 句点

次に句点の欠損状況を表示する。巻一・二には該当例が無い。
巻三以降の諸本間で異なるもののみを挙げる。各本の欠損状況は次の記号によって示す。

- ◎ 欠損が無く完全
- 欠損は無いが薄れている
- △ 一部切れている
- ▲ 大きく切れている
- × 判読不能(句点の有無が確認できない)
- ? 不明

巻丁行	該当箇所	吉田本	真山本	天理乙本	京大本	天理甲本	覆写本	岩崎本
3才5	ほそき。	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
16才9	かくれい。	◎	◎	◎	○	◎	△	◎
17才3	ほそきで。	◎	◎	◎	◎	◎	▲	◎

⑤ 挿絵

挿絵の欠損箇所、諸本間に異なるものを巻一についてのみ表示する。欠損の所在箇所は図に矢印をもって示す。欠損の無いものは◎で表示する。

巻丁行	該当箇所	吉田本	真山本	天理乙本	京大本	天理甲本	覆写本	岩崎本
17才5	し。	◎	◎	◎	◎	◎	▲	?
4才4	な。	△	▲	▲	▲	▲	▲	▲
14才6	まね者	◎	◎	◎	◎	◎	△	○
14才4	おけ	▲	◎	◎	◎	◎	▲	○
15才7	魚。	▲ (有)	▲	▲	▲ (有)	◎	▲	×
15才9	えを	△	▲	▲	▲	○	▲	▲
16才5	女	◎	◎	◎	◎	◎	▲	◎
16才3	肉	◎	◎	△	◎	◎	▲	◎
5才2	束	◎	◎	◎	◎	◎	▲	◎

巻丁	該当箇所	吉田本	天理乙本	京大本	天理甲本	霞亭本	岩崎本
一5才右下		◎	◎	◎	◎	◎	◎
7才右下		✂	✂	✂	✂	✂	✂
7才中下		◎	◎	◎	◎	◎	◎
7才左中		✂	✂	✂	✂	✂	✂
11才中上		✂	✂	✂	✂	✂	✂

⑥ その他

先後推定の参考資料として、刷毛跡等の墨汚れ、印刷状態などに
関する諸本間の異同を一瞥しておく。本書の版下の特徴として削り
残しや刷毛跡等が多く見られることは、前稿(注1論文)において

既に指摘した。気付いた墨汚れは27例に及ぶが、そのうち諸本に共
通するものが14例、残り10例については東洋大・天理乙が各1、真
山・天理甲が各2、京大が3、霞亭・岩崎が各5(霞亭と岩崎のみ
独自に見出されるものが各3)例である。霞亭本・岩崎本に多いこ
とが目を引く。

印刷状態はおおむね良い。東洋大本は墨付きが良く匡郭が肉太に
なる傾向がある一方で、丁の表喉下方にかすれが多く認められる。
(何れも初印と認めることをためらわせる要素である)。霞亭本には
「べたつき・二重写り・太り・ぼやけ」の箇所が多い。紙質の問題
もあろうが、主として前者には摺りの技術が、後者には版木の疲れ
が影響していると思われる。

四

前節で表示したデータをもとに、数量的処理を試みることで諸本
の版行先後を推定したい。まず最も異同例の多い匡郭を取り上げ、
諸本間の版面の優劣を概観する。ここでは(欠損レベルの厳密な比
較ではなく)機械的に個々の優劣を測ることで全体の大枠を把握し
ようと思う。

東洋大学本巻一を例にとって他の各本と比較してみる。天理甲本
と対比すると欠損の度合いが異なる箇所は15箇所あるが、このうち
東洋大学本の方が優っている箇所(すなわち欠損の度合いが天理甲
本より小さいもの)は7箇所ある。同様にして、他の各本との比較
をして、それぞれの異同数と東洋大学本の方が優位である例数とを

示せば次のようになる。

表Ⅰ

対校本	天理乙本	京大本	天理甲本	霞亭本	岩崎本	計
異同数	9	12	15	17	29	82
東洋大学本の方が優位な例数	5	5	7	12	23	52

すなわち延べ異同数82例のうち、東洋大本の方が優位であるものは52箇所、約63%となっている。同様にして、他の巻についても同延べ総数に対して東洋大本が優っている例数の百分比を算出すれば、巻二が88%、巻三が75%、巻四が66%、巻五が48%となる(巻五の百分比が低いのは、東洋大本の優位性が最も高い岩崎本が欠巻であることが影響している)。

このような手順で、他の諸本についても各巻ごとの百分比を算出すれば、次のようになる。

表Ⅱ

巻	東洋大本	真山本	天理乙本	京大本	天理甲本	霞亭本	岩崎本
一	63		70	72	73	40	18
二	88	82	79	85	22	43	13
三	75	82	78	61	76	13	17
四	66	80	82	76	70	15	14
五	48	79	81		52	2	

表から、七本が大きく東洋大本・真山本・天理乙本・京大本・天

(11)

理甲本のグループと、霞亭本・岩崎本のグループの二つに分かれることが読み取れる。なお、天理甲本の巻二が補巻であることはその様相から容易に判断できるのであるが(注3参照)、上記表の百分比が低いことから、この巻のみ匡郭欠損が多い後刷りで、第二グループに近いことが明瞭になる。

次に①で大きく二段階に分けられた各グループ内の先後を推定したい。ここでは文字の欠損異同の例数を取り上げ、上記と同様の操作を行う。まず東洋大本等の第一グループでは、五本がすべて揃っている巻三・四について各本の異同箇所延べ総数と他本より優っている例数とを示せば、次のようになる。

表Ⅲ

	延べ異同数	他本に優る例数	百分比
東洋大本	19	16	84
真山本	9	6	66
天理乙本	11	1	9
京大本	14	10	71
天理甲本	7	3	42

すなわち、この二巻について文字欠損の少ない順に並べれば

東洋大本↓京大本・真山本↓天理甲本↓天理乙本

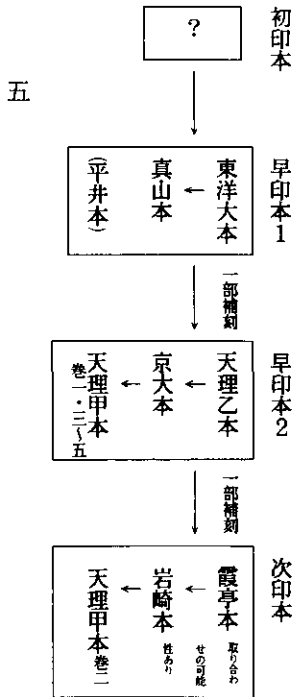
の順になる。

霞亭本等の第二グループは、三本が揃う巻二で比較すると次のようになる。

	延べ異同数	他本に優る例数	百分比
霞亭本	6	5	83
岩崎本	3	2	67
天理甲本巻二	5	1	20

例数が少ないので即断はできないが、
霞亭本↓岩崎本↓天理甲本巻二
の順になる。

以上の操作を欠損全般に応用し、さらに第二節で示した表紙や匡郭その他紙質等を勘案した上で、諸本の版行先後を推定すれば、おおよそ次のようになる。



上記の順位を推定するにあたって、第三節で報告した版面の欠損を決定要素の一つとした。しかし版木と刷り上がった版面を比較す

る時しばしば経験するところであるが、こうした欠損がそのまま版木の欠損を意味するとは限らない。彫刻や摺りの技術、保存方法、版木や紙の側の諸条件など版面に現れた欠損の要因は様々に考えられ、偶然に左右される側面も見逃せない。一方で、挿絵部分などの墨溜りとは別に、鋭角に削り取られた箇所が磨滅や墨の付き具合によって埋められる例も本調査中に見出された。部分的補刻を別にしても、欠損部分のパラツキは避けられないのである。以上の点を考慮して代表的なサンプルだけで判断せず、個々の優劣対比を積み重ねて百分比を出す処理を施すと共に、影響を受けやすい匡郭は目安とするに止めた。諸本が三つのグループに分けられることは動かないが、各グループ内の諸本は共通性が高く、一方数量的な処理には限界があることからその先後は柔軟に捉える必要がある。各グループ内の先後推定の次第を以下にまとめておく。

○ 東洋大本と真山本では、巻二・三は匡郭・文字・濁点のいずれも東洋大本の方が優位。巻四では匡郭は真山本の方が良く、文字・濁点を含めるとほぼ同じになる。巻五はいずれも真山本の方が良い。外装は東洋大本が1・1cm縦長で表紙模様が独自である。以上総合して両者は極めて近いが、東洋大本の方がやや早い刷りの特装本であろう(この点で、縦寸法の差は通例に合致する)。但し東洋大本は喉下方匡郭にかすがが多く墨付きに難が残る。

○ 東洋大本は初印本とは見なせない。このことについては数行に亘る文字の欠損や墨付きなど版面から判断できる(三節の表示及び参考図版参照)。なお水谷不倒氏が『浮世草子西鶴本』で紹介

された署名入り本を初版と考える立場もある。同書によれば、この本は無地左肩簽で大きさは霞亭本・岩崎本に近いがやや小さめ、匡郭寸法も縦横ともにやや小さめである。原本の所在が不明であるため議論の対象からは外すが、本の形態の通例に従えばこれを初版本とするのは疑問である。

○ 京大本と天理乙本、巻二を除く天理甲本とは極めて近い刷りで、三者の先後にはわかには決めかねる。巻一・三・四は天理甲本が良く、巻五では乙本の方が良い。欠損の度合いのみからすると天理甲本が優位のように思われるが、甲本及び京大本のみに現れる巻四14丁の版心の独自性が気になる（他に甲本巻一4丁表に2箇所現れる黒丸点の問題になるが、こちらは墨汚れの可能性も高い）。ここでは版心の異同を補刻に伴うものと考え、乙本の方がやや早い刷りとしておく。

○ 次印本グループの大枠は上述の通りである（表IV参照）。霞亭本と岩崎本の先後について付言しておく。霞亭本は前述したように刷りが悪くかすれやべたつきが目につくほか、3箇所に互り他本に見られない黒丸点がある。また岩崎本は巻一17丁の版心が上広がりであり、「大」の字体が独自である。これらは欠損の度合いの高いことと併せて、二本が後印本で補刻を伴うことを示している。

体裁はほぼ同一、匡郭は岩崎本の方がやや大きい。欠損状況は、巻一は霞亭本のほうが岩崎本に比べてはるかに少ないのに対して、巻三・四はこれが逆転している。試みに両本で匡郭と文字の欠損の度合いが異なる箇所と、そのうち霞亭本の方が欠損の度合いが

小さい箇所の例数とを巻ごとに挙げれば、次のようになる。

表V

計	匡郭					文字					計		
	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計	異同数	霞亭本の優る例数	百分比
73	20	18	21	14	73	5	8	16	43	73	43	58.7%	
43	16	13	9	5	43	16	8	5	29	43	67.4%		
16	7	2	2	5	16	7	2	2	11	16	68.8%		
8	5	1	2	0	8	5	2	1	8	8	100%		
89	27	20	23	19	89	27	16	19	62	89	69.7%		
51	21	14	11	5	51	21	8	5	34	51	66.7%		
57	27	20	23	26	57	27	16	19	62	57	108.8%		

例数が少ないので断定することはできないが、巻四は霞亭本の方が欠損が多いことは留意すべきであろう。

上記の結果と岩崎本巻一17丁の版心にみる補刻、霞亭本巻二・三にみる黒丸点（対照表参照。墨汚れの可能性もあろう）の存在、更には三節で表示した欠損のバラツキなどを勘案すると、岩崎本の段階で相応の補刻がなされたことがわかる。又二本が刷りだめによる取り混ぜ本である可能性も考えられよう。但しこの考えは想像の域を出ない。一応ここでは版心の補刻を重視し、霞亭本が先に刷られたものとしておく。

六

現在所在が明らかになっている『西鶴諸国はなし』は部数も少なく、すべて同版本で版木が譲渡された形跡もない。しかしこれまで

に示した諸本の版面調査から、それぞれの欠損レベルに差があり、部分的補刻や後刷りの題簽があることが判明した。また「限りなく初印に近い」と言われる東洋大学本は善本ではあるが、初印とは距離があり摺りの技術に難があることなどが明らかになった。本書はこれまで考えられてきた以上に多数回版行されたと言えるのではないだろうか。それぞれ一回の印刷部数については不明と言わざるを得ないが、少なくとも時を隔てて何回にもわたって印刷されたであろうことは疑いない。「西鶴の咄本」という側面から、本書の享受史を改めて問い直す必要がある。

流通面に目を向けると、本書は元禄十二年を境にして、以降長期に亘り書籍目録等の流通の表面には現れない。一方版元である池田屋の活動は明和期まで確認されている。現時点で入手し得る情報の限りでは、次印・後印本の版行の実態はまだまだ不分明と言わざるを得ない。この間の隙間を埋める資料の出現が待たれるところである。

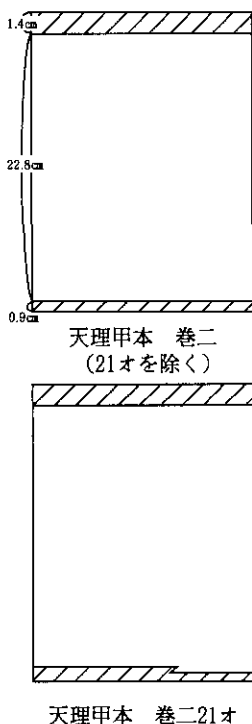
注

- 1 国語国文研究115 (平成十二年3月 北海道大学国語国文学会)
- 2 真山本を除く諸本の書誌解題については、天理図書館編『西鶴』(一九六五年4月 天理図書館)、江本裕編『西鶴選集 西鶴諸国はなし』(一九九三年11月 おうふう 以下東洋大本の図版は本書より転載)及び森田雅也編『西鶴諸国はなし』(一九九六年4月 和泉書院 以下天理甲本の図版は本書より転載)が備わっており、以下の概略紹介と重複する部分がある。

3 各巻1丁表の右肩匡郭寸法 (cm) は次のとおりで、巻二が若干小さい。

巻一	19・2	縦	14・5	横
巻二	19・0		14・2	
巻三	19・2		14・5	
巻四	19・2		14・3	
巻五	19・2		14・4	

全冊裏打ちが施してあるが、巻二のみ原本が短く、天地を二重に裏打ちして他の巻と体裁をそろえてある(左図参照)。



- 4 以下で扱う匡郭欠損には、本書に特徴的な挿絵や文字の関係で初めから削られていたものを含む(注1論文参照)。
- 5 一九二〇年 水谷文庫。『水谷不倒著作集』第六巻(一九七五年1月、中央公論社)所収。
- 6 縦8寸3分(約25・1 cm) 横5寸8分(約17・6 cm)、匡郭は縦6寸2分(約18・8 cm) 横4寸7分(約14・2 cm)である。尺貫法による計測誤差を考慮しても、初版本とするには小さめ



天理甲本



東洋大本

1 参考図版
題簽

- 7 江本裕 前掲(注2)書。
 8 元禄十二年刊『新版増補書籍目録』に「西鶴諸国咄」の記載がある。『廣益書籍目録』では、元禄五年版に「西鶴はなし」があるが、元禄九年以降増補版には記載がない。天保四年3月序の『近世名家著述目録補正』、天保十三年6月序の『著述目録』(版心)に至って記載をみる。
 9 羽生紀子「岡田三郎右衛門・毛利田庄太郎出版書目年表」(鳴尾説林 5 一九九七年九月)。

である。

2 框郭欠損

4才地 10cm 卷二	7才天 11cm 卷一	
		東洋大本
		真山本
		天理甲本
		京大本
		天理甲本
		霞亭本
		岩崎本

14卷 ウニ 5 10行	16卷 ウ一 2 3行	
		東洋大本
		真山本
		天理乙本
		京大本
		天理甲本
		霞亭本
		岩崎本

3 文字欠損

1卷 ウ地 11 cm	3卷 オ天 13 cm	
		東洋大本
		真山本
		天理乙本
		京大本
		天理甲本
		霞亭本
		岩崎本

卷四 2ウ 2行	
	東洋大本
	真山本
	京大本
	天理甲本
	霞亭本